
竜ヶ師洞

kuro-kmd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜ヶ師洞

【ZPDFアード】

Z9958Q

【作者名】

kurro-kmd

【あらすじ】

古より竜とともに暮らしてきた竜ヶ師の里。異変はゆっくりと始まり、急激に進もうとしていた。長の孫娘、龍安と幼なじみの鉛。はるか北の地、ドラコーニアのロキ。永遠に忠実な従者と信じていた竜がその姿を変えた時、竜ヶ師、そしてライダーたちはどうするのか?愛竜・白雲の変生に龍安は…。むかしむかしの、どこかのお話です。おきやんな主人公、異形の主従の恋愛を描きたいがために始めたのですが…はてさて。

澄み渡つた蒼天。陽を受けて白っぽく光る猛禽が一羽、はるか上空を点のように舞つていた。ゆつたりと大きな輪を描く大鳥は、間近に降りれば壮丁が両腕を広げた大きさのはずだ。高く上がりすぎている。地上の獲物を探すのに夢中になつたのか、しかしその甲斐はあつたようだ。自慢の鋭い眼で何かを見つけたらしい鳥は、急旋回して止まつた。それから一気に下ろつと、身震いをしてわずかに振りかぶつた。

その時、かすかに空気が揺れた。風ではない。もつと大きなゆらぎだ。滑降の構えに入つていた大鳥は、泡を食つたようによろめいて水平に漕ぎ出した。追われ始めた姿は、もはや空の支配者ではなかつた。

何か来る。

不運な鳥は、すぐに灰色の岩壁に突き当たつた。垂直に切り立つた無味な岩肌を前に、咄嗟に下した判断が運を転じた。灰色の尾翼がきりもみ状に降下してゆく。間一髪、巨大な蝙蝠のような影がゆっくりと岩肌を舐めた。

切り立つた岩壁に沿つて、影はらせんを描くように昇つていた。しなやかに伸びた首。やらやらと細く長くなびく眉と鬚。獅子ほどの胴体に続く長い尾は、右に左にゆらめいて空気を漕いでいる。大きく広げた骨張った翼が、肉の張りつめた身体を軽々と宙に浮かべていた。

よくよく見れば、その背には人が張り付いている。馬に乗るような仕方だが、背負われているようにも見える。右手が片眉を掴んで引くと、一層上昇の速さが増した。

上へ。上へ。すさまじい勢いで昇りはじめた背後に雲が湧き立つている。白い雲を長く引いて圧力が増してゆく。肩をすぼめるようにして抵抗を逃がしていた翼は、突然ふわん、と広がつて上昇を止

めた。

薄い雲の上に、十余りの切り立つた頂が突き出している。近づくにつれ、無数に穿たれた穴が黒々と見えはじめた。洞は思いのほか大きく、翼を置むようにして飛び込んでくる竜をやすやすと受け入れた。

「おかえり！おかえり！空はどうじや？うんと高く飛んだのか？」首を下ろして地に伏せた茶色っぽい背から、人影が滑り降りた。それを待つていたかのように、短い衣の裾を割つてしなやかな足先が岩壁を蹴る。一度三度と跳ね返るように、肩と踵が同じ高さを舞つた。艶やかな長い髪が遅れて宙に弧を描く。甲高い声は狭い洞にきんきん響き、青年はさも煩そうに眉をしかめた。

「なあ、炎を吐いたのか？」

「馬鹿、そんなこと、この平時にするものか。大鳥にちよつかいを出すから叱つてやつた。最近はなんとかしら、飛びにくくて敵わん。」

まとわりつい小さな影に邪険に手を振ると、青年は壁に開いた背丈ほどの裂け口からそそくさと行つてしまつた。そつと近寄つた影に、ふん、と大きく息を吐いて、竜はぎらつく瞳をさつさと閉じた。それきり岩のように動かない。つやつやとした短毛に覆われた細く長い鼻梁、たてがみをたくわえた様子はまるで馬のようだが、耳があるはずのところには襞のような皮膚が細長く伸びている。長い長い耳のようにも見える、眉と呼ばれる不思議な器官だ。顎先から生えている髭とはちょっと違つたが、翼を置んだ今は、いづれも身体に沿つておとなしく垂れていた。

「乗り手も竜も、揃つて愛想がないの」

長いまつすぐな黒髪の下で後ろ手を組んだ小さな背に、磔の転がる音がぱらぱらと届いた。ぺたりと覚束ない音がして、もうひとつ小さな影が洞の床に尻をついた。

「口の竜ヶ師以外、言つことなど聞かぬと知つてゐくせに」

賢しげな口調は、尻餅の言い訳のような悔しさを滲ませている。少女のふつくらと白い手が、少年の浅黒いそれを取つた。

「うん」

黒々とした睫毛が伏せられるのを、少年は眩しそうに見上げた。

「龍安くりょうあんへ。白雲は？」

「全く駄目だ。ウンともスンとも、一向に通じぬわ」

投げやりな口調を演じる少女の空元氣はすぐに少年に伝わった。幾度も繰り返しているこの問いかけを、気まずくせずに終える術を少年は心得ていた。相づちも打たずにそのまま会話は途切れ、尻をついた少年はじやれるように少女の手を引いた。伏せられた瞳が見開かれて黒々と輝いた。白い歯が溢れる。

「やつさと起きろ。行くぞ、鉛くじやくへー」

引き起こされ tapered と放され、鉛はようめきながらよつやく足を踏ん張つた。長い髪を背に踊らせて龍安が駆けてゆく。ぴたりと脚に張り付いたような股引は本来男の着るものだ。龍安には二親ともない。本人が好むのか、それとも家族の意向か、長い髪を除けばいつもまるつきり少年のいでたちだ。龍安は青年と同じく岩の裂け目から消えた。育ち切った大きさの竜と、この距離でふたりきり。後を追おうと焦る鉛の背後で、空気がのそりと動いた。思わず眼を閉じた少年の背後で、翼がばさりと音を立てた。

「何やつてる」

待ちきれずに戻つた龍安は、逆光の中、翼を緩めた竜を正面に見て息を呑んだ。光に縁取られた滑らかな曲線、引き締まつた肉の先に、鋭いがき爪が磨いた石のように光つている。陽の光を受けた瞳孔が細く糸のようになつてこちらを見ていた。

なんと、きれいないきものか。

どきりと胸を打つた鼓動が全身を駆け巡り、小さな身体は息苦しさに喘いだ。自分の脈で震えてしまいそうだ。見惚れて足を止めた先で、当の竜は忽然と消えた。みつしりと量感のある身体は、不思議なぐらい音もなく飛び立つた。ようやくそれに気づいた龍安は、追

うように洞から身を乗り出した。

はるかに広がる空。あちらこちらに気まぐれに紗の帯をかけるごく薄い雲。その彼方に竜が舞っている。舵をとるよう眉がたなびく。広げたまま悠然と動かない翼は、ただ空気を掴んで浮かんでいるように見える。

龍安は、洞の口の岩肌にくねったように張り付いた松の枝でからうじて身体を支えていた。眼下に遮るものはなく、慣れないものはその霞がかかつた光景に氣を失うだろう。この雲上の里で生まれ育つたせいもあるが、禁忌などものともしない質である。もつと幼い頃からこうして頂きに登っていた。飽きることなく彼方を見つめる怖れ知らずの横顔を、少年はただ微笑んで見ていた。

竜ヶ師洞くりゅうがしほら。

誰が名付けたのか、いにしえから続く里では、人と竜とが対をなしていた。里に赤子が生まれると、必ず小さな竜が見つかった。細い朽ち木の間に、針のような落ち葉の積もった下に、いつも同じ丸く焼け焦げた跡があり、手のひらに乗るような大きさの竜がぶるぶると震えている。産声とともに、竜ヶ師たちは心あたりを歩き回つた。そして赤子に沿う竜を見つけ、地上の里で馬にするように、敷き藁の産着で包んで名をつけた。

赤子は自分の竜と同じ籠で育つ。子が歩き始める頃、竜は犬ほどの大きさになり、同時に籠から出た二者はそれぞれ急激に育ちはじめるのだ。人の子は言葉を覚えて一本脚で立ち上がる。竜は火を噴くもの、水を集めるもの、雷鳴を轟かすものとその道を現した。そんな人と竜とのつがいが崩れたのは、七年前のことだった。

「白雲はどのような質かなあ」

銘が始めた話はふたりの気に入りだつたが、竜の飛翔を間近に見た興奮で逆に萎んだようだった。

「母様がいれば…聞けるのに」

木立に覆われた細い谷を下りながら、龍安の言葉はだんだん小さく

なった。足の下でぱしばしと積もった小枝が折れる音がする。踵をにじるよつにしてわざと大きな音を立てながら、龍安は眼につく葉をむしって歩いた。

「白雲…ほんとうに届るのがうづか

「ぐく小さな龍安の声は、風切音で搔き消された。とげのある大きな木の実が次々と飛んでくる。わああ！と襲撃の声が上がった。

「お前ら講をさぼりやがつて！竜をもたぬ奴はこれだから…」

同じような年格好の少年ばかり五、六人。土手のようになつた横手の藪を滑り降り、皮を張つた小枝を構えて木の実を弾いてくる。

「くそ、その茨栗は反則だ！みんなで決めたろう」

銘らしい理屈に少年たちが一斉に笑つた。反則だとさ、反則！

「お前らにはこれで丁度いい。竜ナシ！」

「竜ナシ！」

はやしたてる声に、少女の白い頬には真つ赤に血の色が差し、立ち尽くした少年は真つ白く色をなくしていった。

「龍安は違う！白雲をもつているんだから…」

怒りの漲つた声。龍安だけがそこに桁違ひの絶望を聞いた。

「白雲なんて竜は見たことがないぞ。誰か見たか？」

一斉に笑い声が上がつた。

「母者の竜をおとしめるな！」

手近な少年に飛びかかった龍安は、組み合つた襟を引きちぎり、馬乗りになつて転がつた。両側を塞がれた細い道は急な坂。『じろじろ』と下へ転がりながら、一回り体の大きい少年の髪を掴み、華奢な少女は思い切り殴りつけた。

「白雲は天の頂きにいるんだ！オサ様が、爺様がそうおっしゃつた！母者の竜をおとしめるな！」の馬鹿

いつしか泣き声が漏れていた。いくつ殴つたのかわからない。龍安の腕の中で縮こまつた少年は、ひいひいと悲鳴を上げ、涙と鼻水でぐちやぐちやの顔を必死に覆つっていた。

龍安は違う。

そう叫んでくれた幼なじみに、少女は助太刀の言葉をもたなかつた。

竜ナシ。

鉢は生まれながらにそう言われて育つた。里で最初の竜をもたぬ者だ。それは本来ただの事実で陰口ではなかつた。鉢と龍安が生まれた年から、竜が見つからぬ「竜ナシの子」が年々増えている。いつしか竜ナシというのは独特の印象を与える困りごとの呼び名になつてしまつた。それでも鉢は自分の竜の話を聞いてくれる。さつきだつて、白雲はどんな質だろうかと？

悔し涙を振りこぼしながら、龍安が止まつた。のしかかつて振り上げた拳がのろのろと下ろされる。気配を感じた少年は、這うようにして逃れた。

気圧されて竦んでいた少年たちは、転がるよつと一斉に走り出した。しん、と奇妙に静まつた中、ぱしりと小枝が鳴る。振り仰ぐと鉢が手拭を差し出していた。膝立ちになつた龍安は、松葉だらけの髪でくすりと笑つた。涙こそ止まつているが、目の縁が赤い。鉢は万事に準備がよかつた。

「何が可笑しい、そんなにやられて」

「やられて？殴つたが殴られてやしない。あんなの当たるものか。

…鉢、お前、血がでている

指差されたこめかみをそつと撫で、鉢は顔をしかめた。

「そつちは衣が破れている。…また伯母上に叱られるな

「伯母上なぞどうでもよい」

素つ気なく頭を振つた龍安に、今度は鉢が手を差し伸べた。掴んだとみるや、力任せにぐつと引かれる。いつものように鉢は呆気なく倒れ込み、龍安はからからと笑つた。肘や尻の下で小枝が乾いた音をたてた。

「あいつら、飛天の日を迎えて、きっと竜になど乗れぬ。たとえ意を通じても浅ければ乗れないのじやから。伯母上をみろ、それなら持つていないと何が違う？」

転がったふたりは両腕を広げて天を向き、並んで地面に大の字を描いた。

「きっと鉢には他のしごとがあるのだ。だつて…」

もういい、と言いかけて、鉢は両手を天へと伸ばした。竜をもたぬせいなのか、洞で間近にいた竜が恐かった。龍安はそのようなことがない。きっとさつきのあいつらだって、怖れたことなどないのだろう。ひとつ籠で育つのだから…。

突然鉢が跳ね起きた。いてつ！と叫んだ脇腹に、小さな茨栗が刺さっている。実よりも刺の方が大きい凶暴な栗を、火でも点いたよう振り払った少年も、目を丸くした少女も、可笑しくてたまらぬというようにはしきり転がって笑い続けた。

松葉を払い、沢で顔を洗つて手拭を使つたふたりは、鏡を合わせたように肩をすくめた。かつてひと月遅れで生まれた鉢は、わざかに線が細く身の丈も小さい。向かい合つた龍安の空色の衣は、胸元を併せる紐がちぎれ飛び、細かな模様が刺された襟は半分はずれてぶら下がっている。あちらこちら泥に擦れて毛羽立ち、取つ組み合つたそのままの形が残つていた。

歩きながら揉んだ薬草を手渡され、鉢はおざなりに顔の傷に押し当てた。ちぎり取つて茎がついたままの葉が立て続けに突き出される。あれこれ口には出さないが、龍安なりに心配しているのだ。押し当てていた葉の濡れた固まりがぽろりと落ちたが、鉢は気にせず笑つて受け取つた。一枚ちぎるとそのまま平らに口に当てる。ぶう、びい、と滑稽な音がして、ふたりは声を上げて笑つた。それからすぐ単調な旋律が生まれた。

「ほんとうに何でも奏でてしまう奴じや」

呆れたような賞賛が少年には心地よかつた。細く暗い谷の道は曲がりくねつて続いている。眼前には低い垣と、並んだ樹をそのまま生かした小さな門が近づいていた。し、と唇に指が当たられ、鉢は慌てて葉を捨てた。喧嘩が常習の少女は、衣の始末をつけるため、裏からこつそり乳母の離れに向かつていた。

「家が大きいと助かるな」

きょろきょろと辺りを窺いながら鉢が囁く。屋敷の裏側は使用人たちの住まいで、棟を刻んだように小さな家が並んでいた。平らな地面にそいこの里では図抜けた広さだ。横手には低い柵で囲まれた大きな小屋がある。ちらりとそちらを窺つた鉢に、龍安はにやりと笑つてみせた。

「いつもと同じ、食べて寝ているばかりじや。それ以外の姿を見たことがない」

小屋には伯母の竜がいる。なぜ牛馬のように竜を身近に置くのが、龍安にはわからない。物心ついた時から華綾という竜は屋敷にいた。

竜ヶ師と一対をなすとはいえ、その竜がいつも近くにいるわけではない。昔はともに眠つたと言われるが、今では竜は頂きに、人は切り開いたわずかな地に集つて暮らしていた。たとえどこに居ようと、竜は竜ヶ師の命で即座に飛来する。そこには絶対的な服従があつた。その疎通は言葉ではなく、ただ念ずるとか意を通ずるなどと言われる。龍安はまだその感覚を知らなかつた。

「このようなどころに置くから

「？置くから、なんじゃ」

言葉尻を取られて足が止まつた。麦の刈取で忙しい昼下がり、人気がないことに安心していた鉢は思わず飛び上がつた。当の小屋の軒先で白い絹が翻る。薄衣を掲げるよにして陽を避けた女が、柳のような腰を捻つて振り向いていた。

「このようなどころに置くから、なんじゃと？」

薄い弓形の唇がにっこりと笑つてゐる。繰り返す口調には嘲るような気配が滲んでいたが、それが自嘲だと気づくには少女も少年もまだ幼かつた。明らかに同じ血を引く姪の白い顔に、女は細い眉を片方だけ上げた。

「何でもありませぬ

素つ氣なく行き過ぎようとした後ろ姿に、さらに声がかかつた。

「乳母やは留守じや。わたくしが使いに遣つた。」

少女が肩越しにきらりと睨む。それから諦めたようぐるつと皿を回して見せた。

「鉢や。賢いお前がついていながら、また喧嘩をしたのだね？龍安、どうしてお前は争いごとを避けられないのだろう。頼み事があるである？そういう時はきちんとおじ。」

結局伯母の部屋に衣を脱ぎ捨て、龍安は無言で駆け出した。ただ従つていただけの鉢は、糸を扱くまつ白な女の指にじどきまきしながら、ようやく後を追い始めた。龍安の伯母は里で一番美しい。なのに嫁

がず屋敷に籠り、女の盛りはとっくに過ぎていい。炊屋を覗き込んだ龍安は、ふかしたての饅頭をふたつ、蒸籠から素早くかすめ取つた。

「伯母上様にあんな口をきくのはよくない」

龍安は素知らぬ顔で饅頭を頬張つている。

「母上様の姉様だらう？　たつたひとりの伯母上だのに」

「鉛がそんなことを言つのは、伯母さまがきれいだからだらう？　伯母さまなど、飛ぶこともできぬのに。小さく咳いた龍安は饅頭を口一杯に押し込み、着替えたばかりの衣の裾で手のひらをこじりじと拭つた。

竜に乗れない竜ヶ師は少なくない。太平の世、ことに女に生まれれば、龍安の伯母のように屋根の下から一步も出さずに暮らす者もいる。かつて竜ヶ師は、各地の王からお呼びがかかると竜兵として参じた。荒涼とした山の里は、最強の傭兵を差し出すことで生き延び、竜との暮らしに合わせて上へ上へと住まいを移した。勇名を馳せた少女の一親はすでにはない。父がその竜とともに戦で命を落としたのは、少女が物心つく前のこと。母は龍安を産み落とした禢で命まで落としてしまつた。

「お前はほんとうにあの娘にそつくりだこと。でももう戦は終わりじや」

父母の戦場での逸話ばかりせがむ姪に、伯母は呆れたように幾度も言つた。天下を分ける戦は終わつたが、戦士の里ではあまりにも多くの者が死に、系図には六の方が多いつた。

心地よい秋の日。広く開け放たれた母屋の角で、白い衣が動いた。つい、と滑らかな所作で立ち上がつた姿は、戸を引こうとして止まつた。豊かな銀色の顎鬚を胸まで垂らした老人は、孫娘の頬に引っ搔き傷を見つけて破顔した。

「喧嘩をしたか。それで勝つたか」

里の長の声は朗らかでよく通り、鉛は饅頭をくわえて飛び上がつた。

お前は驚いてばかりいる。可笑しそうに囁くと、龍安は縁側にぺたりと腰を下ろした。やんちゃで聞こえている少女は、この祖父にだけはよく従つた。

「 なあ。オサ様。わたくしが生まれたときのことを鉛に話していくだされ。白雲は、自らわたくしの産屋へ来たそうじやな？天高く舞つていたのが、この辺りに突然舞い降りたと？そしてこう？頭を下げるようとしたそうな？」

話をせがんでおきながら、一息に自分で話してしまつた。かつては竜に跨がつて天を駆け、戦に参じたという竜ヶ師の長は、好々爺然と鉛に笑いかけた。少年が生まれた時、ふたつ下の谷で、頭をもがれて乾涸びた竜の死骸を見つけたのは、まさしくこの男だつた。考えてみれば、ちいさな赤子の竜である。かつてないことが、大鳥か孤狼に狩られたのやもしぬ。慄然としながら小さな死骸をひそかに葬り、ただ竜が見つからぬとだけ里に触れた。それ以来、年に数人竜をもたぬ子が生まれる。あれ以来死骸はなく、竜がいない理由すらわからぬ。

鉛は微笑んで聞いていた。竜ナシの子の前で、竜の話をする者はない。ただ龍安とだけ、鉛は竜の話をすることができた。自分の竜を見たこともない龍安は、半分だけ竜ナシのような、より一層の宇宙らりんだ。同じ年に生まれ、ともにはみ出したふたりは幸いウマがあつた。鉛がすつかり覚えてしまつた龍安の話から、母親の死は巧妙に除かれていた。

「 ホオホオ、またその話か。」

縁側辺りに座り直して、老人はゆつたりと顎鬚を扱いた。疎外されながら、まっすぐに育つてているらしい少年が好ましかつた。左様、どのように案じても子は育つてゆく。

「 オサ様。竜ヶ師が死ねば、その竜も死ぬ。逆に、その竜が死ねば竜ヶ師も死ぬと・・・？竜は強いから・・・滅多なことで先に逝くことはないけれど・・・」

そしてある日、幼子は思いもよらぬ問いを発するのだ。老人の手

が止まつた。まだ七つ、もう七つ。講に出るようになつて、里のこと、竜のことを聞かされ始めたばかりだ。老いてゆく身にとつて、孫娘の成長は楽しみでもあり恐ろしくもあつた。胡座の膝に重ねるように腕組みをして、軽く臉を落とした老人の沈黙が少女を促した。

「わたくしは見たこともない…白雲は？」

鉢の方がごくりと息を飲んだ。

「白雲はほんとうにいるのですか」

じきに自分の竜と意を通じるようになる年頃だ。普通はそれまでにもつゝすらと通じているものだ。どこかで竜の存在を感じているのが、ある日鮮明になる。あるいは徐々にくつきりと意識されてくる。そして時が満ちた時、呼びかけに応えるように自分の竜が飛んでくる。多くの者は頂に登つた。その時だけ、主である竜ヶ師のほうが従者の竜を出迎えた。

「龍安」

少女が居住まいを正した。爺様の声色は、いつもと少し違つていた。それを感じ取つた鉢もまた、少女から膝一つ下がつてかしこつた。

「白雲は、お前の母の竜じや。それは知つておるな？お前の母は、お前を産んで亡くなつた。本来、そうなれば竜も死ぬが？白雲は死なんだ。産屋の前庭に一旦降り立ち、それから頂へ向かつて飛び去つた。」

「なぜ白雲だけ死なないのですか」

龍安は必死だつた。はじめて面と向かつて問ひ、まさか真正面から答が得られるとは思つていなかつた。それはもはや子ども扱いされていなかつことだ。握りしめた拳は、膝の上で汗ばんでいた。

「なぜかは誰にもわからぬが、初めてではない。お前の婆様も、その母も、子を得ると引き換えに命を落とした。白雲はもう四代、四人の竜ヶ師に引き継がれてきたのじや。」

老人は、深く沈めていた苦い思いがじわりと涌き出すのを感じていた。子を産めば命を落とすと、女たちが代々恐れてきた家。そして

何代も、女しか生まれぬ家。無事にひとりを産み落とし、安堵した翌年のこと。生むな、やめないと喉元まで出かかつたが、到底言えなかつた。何代ぶりかでふたり目を身ごもつた妻は、誇りしげですらあつた。

「竜と竜ヶ師、どちらかが先に死んでも、残されて無事なことがあるといつことじやな。」

鉛とて添う竜がないのではない。先に死んでしまい、残されたのだ。老人は飄々と笑つてみせたが、龍安は笑わなかつた。

「爺様。母上様が死んでしまつたのはわたくしのせいなのか？」上の娘は死を怖れて嫁がなかつた。そしてもうひとりは竜兵として果敢に戦い、戦場で恋をして、女の幸せの絶頂で死んでしまつた。

「そんなわけがない」

老人は一文字に固く結ばれた口元を見た。落とすまいと堪えた涙が大きな瞳の縁に盛り上がつて震えている。亡くした妻、亡くした娘と同じ竜をもつ孫娘。

「理由は別にある。きっと、お前が生まれるずっと前に」

少年のよくななりをさせても、白い滑らかな肌は際立つていた。やがて美しく育ち、夫に添い、子を成したいと願うだらう。その頃空はどうなつているだらうか。

拳で目を擦り、龍安は床の一点を見つめている。憂いを払つようには、老人が衣を鳴らして立ち上がつた。古兵の瞳が煌めいた。

「龍安。白雲に乗つて天を駆けたいか？」

「もちろんじゃ！ 爺様。わたくしは白雲の背に乗つて、誰よりも高く、天の果てまで駆け上がる！」

「もう直じや。もう少し待て」

母譲りの気の強さ。それこそが竜ヶ師の本性だ。どきどきと脈打つ懐で手拭を握つていた鉛の前に、皺だらけの手が差し出された。

「お前ならば、鳴るやもしれぬな」

大きな掌に隠れていたずんぐり短い木片はしつとりと艶があり、七つ八つほど不揃いの穴が開いている。

「湧雲くゆうづと名が付いておる。見るからに吹くものだろうが、さて、百年このかた、だんまりじや。せいぜい弄つてみるがいい」

中庭らしく木片はさく軽い。鉛の手の上で、それは小鳥のように暖かかった。ただ幾度も頷くだけの少年の頬は、興奮で熟柿のようになじまっている。長に向かって顎を上げたままの鉛の膝先に、好奇心の固まつた白い額が寄せられていた。

いつの頃からか、史本に残らぬほどの中から。群雄と呼ばれた小国の王たちは、互いに戦を仕掛けては領土を分け直していた。やがてそれらの国々は大きくふたつに分かれ、徒党を組んで相対するようになつた。武力に勝るふたつの国がそれぞれの輩下を束ね、改めて国を名乗つた。

片や、大陸の北東から南西を占める朱護くしゅごへ。

片や、多くの島々からなる海原を得たブレガリア。

大国の軍はみるみる大掛かりになり、多くの民を投じて争いを繰り返した。長い長い戦の間、竜ヶ師たちは竜兵として戦つたが、今では戦は絶えた。なぜなら？

「ほんとうに神が怒つたのか？ それであのよろづや
ゝが、あつという間にそびえ立つものか？」

草の上に投げ出された脚が膝を立て、三角に組まれてはまた伸ばされる。一時もじつとしていない龍安を、鉛は突つ立つて眺めていた。掌は懷に忍んで小さな木片を弄んでいる。長に授けられた笛だつた。

「そう言われているからそうなんだろう？ 戦ばかりにかまける人間に怒つた神が、ふたつの国の中を裂いた。焰山は一夜のうちに天を突いて盛り上がり、幾月も火の礫を降らせた。今も周り中が熱くて、とうてい歩いて越えることはできないって。向こう側ではレッド・ベルトと呼ぶそうだ。レッドは紅いことだが、きっと火の色を言つんだ」

すらすらと淀みない言葉を聞いているのかいないのか、龍安は講の内容を反芻しているらしかつた。自分が聞いたばかりのことを鉛はたいてい知つていて。代々学に優れ、里のすべてを書き留めてきた家に生まれればそんなものか。羨むことはもとより、いちいち感

心することをやめなくなっていた。当たり前のよう尋ね、答が返る。即答がなくとも、翌日かそのまた翌日、問うた側が忘れていた答をもってきた。小柄で樂に長けた幼なじみは、まるで龍安の字引だつた。

「ふうん。何もかも神様の仕業か」

「それはきっと明日にでも習つ。それより早くツチガメの花を探そう。日が暮れる前に」

戯れに「ごろごろ」と転がっていた龍安は、くるりと身を翻して器用に起き上がつた。

「では、焰山を越えられるのは鳥と竜ヶ師だけじゃな。地面が熱くて、歩いて行けないのなり」

「飛び越えても狙い撃ちにされる。向こう側にだって竜ヶ師はいるんだから」

すぐに飛んで行つてしまふのではないかと案じるように、少年のぼやぼやと煙った眉がひそめられた。秀でた額は確かに学問の血筋を感じさせる。野山にいることが多いなり、生来の白い肌は小麦色に焼けていた。

「それでは戦がなくなつた、というのは嘘じやな…。それでも飛天のときには山のすぐ側まで飛ぶのか。あぶない、あぶない」少女は好対照な白い頬を緩めて笑つたが、笑顔はすぐに消えた。自分が飛ぶ日が本当に来るのか、長に改まって話をされた後では、なおさら待つことが歯がゆい。そしていつか、鉛と自分は道を分けるだろうといつう予感が、龍安の心持ちにかすかな変化をもたらしていった。

「鉛。ツチガメの花」

「ああ、うん。ツリガネソウにそっくりな白い花だが、丈が低く、葉も違う」

「見つけたら大いぱりじやな?」

「うん」

普段の暮らしで知るはずのことが、龍安からはすっぽりと抜け落

ちていた。それは今日のように時折鉛を驚かせる。焰山のことなど幼い頃から聞かされて、もの心つく頃には当たり前のことになつているはずだ。龍安が知つてているのは両親の華やかな戦歴だけで、その武勇伝も断片的なものでしかなかつた。

かなり登つっていた。頂近くにぽつかり開けた草地は薬草の宝庫だが、初冬にさしかかる今、人影はない。天高く乾いた地では滅多なことでは雪にならず、強い風になぶられた全ての水気がみつしりと凍り付く。もうじき辺りは無彩色の氷に閉じ込められる。草本が冬芽になるこの時期は、希少な薬草の場所を知るよい機会でもあつた。無論、大人はみな熟知していることだ。

「鉛は薬師に向いているだろうが、わたくしは竜兵の方がいい。今の竜はまるで行商の使いじゃもの…」

「戦がないのはよいことだ。誰も死はない。そうだろう?」

龍安は渋々頷いた。習つたばかりのツチガメの花は、竜の強壮にたいそう効くのだという。人に使えば長悪いの病人が歩き出すといふので、高値で売り買いされていた。雲上の里には珍しい草木が育ち、古来から竜ヶ師は優れた薬師でもある。何本も針のような頂が聳える円柱のような山には田畠にする土地がない。最低限の瘦せた穀を育て、肉を狩るには下界へ飛び立つ。むかし傭兵として得ていた金品を補つために、今では竜ヶ師は薬草を商つようになつっていた。

「鉛！あつた！ツチガメの花じゃ！鉛！」

白い釣鐘の形の花が、丈の低いぐんぐりとした茎の上で貼り付くように萎れていた。五裂の葉は肉厚。興奮して屈み込み、叫びながら振り返つた龍安は、鉛の遙か後方に小山のようすに盛り上がつた濃い灰色の塊を見た。暗い毛の中に小さな赤い目が光つていて。尖った耳が風に凧いだように寝て、獣は弾かれたように四つ足で跳んだ。勢いづいたように一直線に向かつてくる。

「じゃく！－じゃく！－弧狼じや！逃げる！」

風に向かつて叫ぶ声はなかなか届かない。気が触れたように腕を

鉢は、みるみる迫る獸を振り返り、凍り付いたように立ち止まつた。水牛を一頭合わせたよりもつと大きい。そのくせに俊敏で、走りながらかつと開いた口は不気味に赤く、垂れた長い舌の横で淡黄の牙がぬらりと光つた。

卷之三

足下の石を探つて投げつける。まるで届かない距離だが、巨大な
弧狼は、自ら向かつてくる変わつた獲物に向けてかすかに進路を変
えた。

血のような色の目、小さな黒い瞳孔。一步で子どもの背丈ほどを飛びながら、獰猛な獣の全身から湯気が立っていた。どちらを狙うか迷うように蛇行して走る。わずかに時を稼いだことを悟った龍安は、そうと知る前に再び走り出していた。

鉛の腕を掴み、抱えるようにして走る。どちらの喉が鳴っているのか、ひいひいと掠れた音がする。ばたばたと纏まらない四本の脚は、すぐに絡んでどうと倒れた。

胸が破れそうな勢いで、心の臓が脈を打つ。ひりつく喉が狭くなり、とうとうくつついたような気がした。息が苦しい。しつかりと鉛を抱え込んだ龍安は、倒れたなり地面に伏せた。

れぬ。どくつ、どくつと身体が震える。

暖か止まつた。

少女の長い髪を巻き上げて
猛烈な風が吹き抜けた
緑して豊かな
絶叫が長く尾を引いた。

血の匂い。

生きてる。自分も鉛も、生きている。ぶるぶると震えながら頭をもたげた龍安は、肘をついた肩越しにゆっくりと振り返った。あわやという距離で、灰色の獣が倒れている。その傍らで、大きく翼を

広げた竜が一匹、首を下げるこちらを凝視していた。

転んだままの鉢を置いて、龍安は震える膝で立ち上がった。枯れ草の根に足をとられながら、一步一步踏み出す。急に冷たくなった風が、昨日より少し早い日暮れを告げていた。

鮮血に濡れた鉤爪。長く垂れた耳。燃え盛る炎の色をした瞳。銀灰色の艶やかな短毛が、陽を受けて輝いていた。ぽつぽつと縁が残る灰色の枯野と灰色の毛、重たそうに散った血の赤が、目に痛いほどの対照をなしている。しかし龍安は、まっすぐに己の竜だけを見ていた。半ば開いた唇は震えながら止まり、一度、二度と唾を飲み下した。

「はく…

? 口に出さずともよい。すべてわかるから。

不思議な意思が流れ込んで来た。頭の内側で声がする。龍安は思わず首を振つてぐるりを見渡した。

草上で腹這いになつたまま、鉢はそろそろと半身を起した。吸い寄せられるように覚束ない足取りの後ろ姿、その先では竜が翼を拡げて地に伏せ、低く首を伸ばしている。銀色の輝きに縁取られたような、大柄な竜。

あが、白雲・・・

かれこれ四代、竜ヶ師が死んでもその命を永らえたといつ。一言一句漏らさず、胸に刻んだ長の言葉が蘇つた。とうとう龍安が己の竜を得た、それによつてもたらされるであろう動搖に長いこと備えていた。しかしこうしてその光景を目の当たりにした今、鉢は言葉を失つていた。

通り過ぎやま、龍安は丸く盛り上がつた死骸にちらりと目を遣つたしばしの間。

立ち止まつた龍安が、いきなり右腕を振りかぶつた。あつ、と声を上げたとき、ぱしりと音が聞こえたような気がした。己の竜を平

手で打とうとした少女は、優雅にかわされてつんのめつた。血の色に染まる頬が見えるようだ

懐がじんじんと熱い。鉢は襟を分けて手を差し込み、唸りながら笛を引き出した。転がった湧雲は変わりなく見えたが、まるで細い喉が思い切り息を吸い込むような甲高い音を立てていた。

ヒイ
・
・

頭上で風が巻き起つる。湧雲の悲鳴のような音、その遙か上方で、ばさりと空気が動いた。絞るように二度、三度と瞬きを繰り返して空を仰いだ鉢は、翼を広げた竜の真下にいた。銀色の竜はぐんぐんと上昇してゆく。その首にぶら下がった龍安の絶叫が、地上の鉢に降ってきた。

「わたくしは主だ！わたくしの言つことを 聞かぬかああああ！」

高く！高く！銀色の竜は絞るみつて翼をすさまめ、遭ぐみづて一気に昇つてゆく。みるみる声は遠くなつた。ただキンキンと叫んでいた龍安だが、それはすぐに幼い悪態に変わつた。

「この、間抜け！あるじを殺す氣か！？」

「馬鹿、馬鹿竜！どこまで昇る氣じゃ！！勝手に飛ぶな！」

「やめろ、回るな、落ちる、おけろー！」

手足が自由ならば、何をおいても飛びかかり殴りつけるだろうが、からうじて首に抱きついている龍安はそれどころではなかつた。とつくに飛び降りる機を逸している。悪口雑言を吐きながら、振り落とされまいと必死だ。艶のある短毛は滑りやすく、筋張つた太い首は子どもの腕に余る。細い脚がばらばらに宙を舞い、かじりつくよう腕を引いた。ようやく膝を寄せて固く締めると、だめ押しのように耳を掴んだ。思う様たなびいていた柔らかな皮を掴まれて、竜は身を捩り頭を振り立てた。

まつすぐ垂直に天を指していた紡錘形の姿が、一気に翼を開いて吼いだ。くねるように頭をひねり、自らの首筋にしつかと食いついた小さな竜ヶ師を振り返る。急に速度を落とされて思い切りつんのめつた龍安は、炎の色をした瞳に食いつきそうになつた。ひと呼吸を置いて、ずる、と背まで滑り落ひた。

「おま、お前！わざとじやな！！」

竜の意は竜ヶ師以外には聞こえぬ。一体どのような返答を聞いたのか、龍安は真つ赤になつて片手を振り上げ、今度こそ竜の首筋をぽかぽかと殴りつけた。意に介さずといつぱり、白雲は軽々ととんぼを切る。そのまま勢いに乗つて降下し続けた。ぐんぐん地に迫る銀色の竜は、鉛の鼻先をかすめて一気に上昇に転じた。うねるよう長く長い尾が続く。

「うわああああああああーー！」

甲高い叫び声だけが残つた。

鉛は枯れ野に後ろ手をついて横たわり、あんぐりと口を開いて天を見上げていた。あれが対の、竜とその竜ヶ師の初乗りか？まるで天空で取つ組み合いの喧嘩だ。遠目に赤い龍安の頬は、興奮とも怒りともつかない色をしていた。

この日が来たら

龍安が白雲と意を通じたら、おれたちは違う道をゆく。

龍安が感じていたのと同じことを、鉛もまた胸に抱いていた。
そうしたらきっと、自分は妬ましさと淋しさで胸が破れるだ

るわ。

おれはひとりぼっちの竜ナシになるんだ。

竜をもたないやつは他にもいるが、龍安の代わりなんかいやしない

い

だからそんな日はずつとこなればいい。

心の奥底でそう願つていた。決して表には出せない、深く深く埋めた真っ黒な思い。

悶々とした秘めごとは、いざ田にした光景の前で、すっかり形をなくした。はは、あはは！鉛は大きく口を開いて思い切り笑つた。人は己の話を美化するものだが、伝えられる初乗りはどれも儀式のように肅然としていた。向かい合つてお辞儀をしただの、地面に伏せた竜に堂々乗り込んだだの。こんな風に乗り出すなんて。いきなりあんなに高く上がつて、己の竜に殴り掛かっている。

は、あはは！体の底から笑いが涌いてくる。あれこれ考え込むより、竜に乗つた龍安を見ている方が何倍もいい。昂つて腕を振り回し、草をむしって撒き散らした鉛は、改めて脳髄をつんざくような音に射抜かれた。

ヒイ
・・・

ピヨオオオオ・・・

ウルル、と震えるような音をたて、湧雲は実際にふるふると小刻みに揺れていた。まるで手招きされたように、鉛は天空から地上に

引き戻された。瞬きを忘れていた瞳が潤み、ぱちぱちと目を瞑る。懐から転げ出した木片はうつすら赤く見えた。それほど熱をもつて鉛を呼んでいる。少年はそろそろと、かじかんだ指先を伸ばした。

「おま、お前！主が、お、落ちる！…」

固く目を瞑った龍安は、また風が変わったのを感じた。鉛と鼻がくつつくかとこりで急激に転回した後、矢のように上昇に転じた白雲は、少しずつ翼を拡げていた。風を切る音がすさまじい。びょうびょうと鳴る轟音が耳を塞ぎ、氷の粒が頬をかすった。

初冬の空である。まだ陽はあるが、少し昇つただけで空には細かな氷が舞っていた。風切音で自分の声も聞こえない。風に抗うように口を開いた龍安は、また己の中でも鳴る声を聞いた。

耳を引くな。引けばそちらに急に曲がる。

「曲がる？これは舵なのか？」

風が凍みて潤んだ瞳から、薄く涙が飛んだ。先ほどから掴んでいた耳は、鞣した仔ウサギの皮のように柔らかい。違っているのは、それ自らがほんのり暖かいということだ。しかしこんなに薄く滑らかで、大きな毛皮を龍安は知らない。これをぐるぐる巻き付けて眠つたらさぞ具合がよからう…・・・

子どもと眠るなど、じめん被る。

「いや、勝手に返事をするな！」

洪笑のような風が起こつた。錐揉むよひ、白雲は斜めに昇り始めた。目が回る。くらくらと頭を振りながら、龍安は必死に膝を締め付けた。同時に強く左手を握つた。

錐揉みで捩じれた竜はぱらりとほどけ、優雅に大きく転回した。左に回りながら、小さく右に頭を振る。感じた小さな手が右の耳を

掴んだ。続けざまに竜が身を返す。弧が繋がつて、天空に大きな輪が二つ描かれた。

「わかつた、白雲！わかつた！こうじやな？」

両手でぐいと掴んだとたん、白雲は背中から回った。柔らかに一杯に反り、長い尾も反らし、まん丸な輪になつた背に、龍安は懸命にしがみついていた。ついに脚が離れ、両の手だけでぶら下がる。凍えた指先はいうことを聞かず、柔らかな耳をとうとう離れた。

「きやアアアアアアアア！」

固く目を瞑つた龍安は、次の瞬間、ぼすりと何かに座つていた。しなやかに一回転した竜の背に再び乗つている。大きく息を吐く様に、白雲が笑つた。初めて聞く竜の笑いは、頭の中で巨大なふいごが鳴るようだった。

はーはーまあまあ、筋はいい。

「母様はどうじやつた？母様も」

忘れた。

いつさい躊躇のない声色が頭の中でぽろりと転がり、かつと沸騰する血の色で瞬時に燃え尽きた。しかし燃えカスのように残つた声がじんじんと駆する。

忘れた、だと…？

無礼なやつ、どうしてくれよう、平手打ちを構える前に、白雲は微笑んだ。背に貼り付いているのだから、顔が見えるわけではない。それに竜が微笑むなど、見たこともなければ想像もできぬ。それでも確かに、龍安は白雲の微笑みを感じた。ほんのひとすじ、苦いものが混じつた笑み。毒気を抜かれたように力の抜けた龍安を乗せて、白雲はさらに大きく弧を描いた。

「いや、寒くない。空に居るのはいい気分じゃ。」

白雲の首がかすかに傾いた。龍安もそれに倣う。ともに見下ろした地上の鉛は、掌に乗るほどの大さだ。紅潮した頬が緩んだ。まるで藁細工の人形じや。伯母上が拵えるのによく似ている。．．．その人形がぽんと跳ねた。焼き栗でも掴んだように、小さなものが一緒に跳ねた。それを慌てて捉まえたように見える。鉛らしからぬ滑稽な動きに、龍安は声を上げて笑った。

実際、火の中の栗を握つたようだつた。触れたとたん、悲鳴のような音は止んだが、代わりに鉛が声を上げた。

「あッ！」

振り払つた笛はすぐにまた泣き始め、慌ててお手玉のような手つきになつた。まるであやされる赤子のように、笛は今度は笑い出した。くすくす、きやつきやと声がする。幾度か宙を舞う間にすぐに熱は引いて、それは少年の掌にすっぽりと納まつた。

ふたつ三つの幼子の相手をしているようだ。呆れた鉛は、じく自然に唇をつけていた。宥めるような気分だつた。尾のない魚のよつなぽつてりとした形は、意外にぴたりと手に沿つ。すう、と風が流れた。どこかで鳶が鳴いたと鉛は思つたが、空には白雲の姿しかない。手の中のものが鳴つたのだと、悟つた瞳が煌めいた。もう一度、今度は遠慮なしに息を入れた。

ぴりり、ぴりりと気が震える。

「じぐじぐ細かな震えが次第に層を成してゆく。ぽつかりと開けた草地の上、チリチリと金氣の音がして、何かが勝手に膨らんでいる。そして。おおん、おおんと彼方で応えるものがある。白雲は中空に留まつたまま、地上を見下ろして目を細めた。ぎゅつと脚を締めた龍安は、頂の向こうからまつすぐに走つてくる雲を見た。まるで生き物のように沸き立ちながら向かつてくる。弧狼に追われた時の冷や汗が蘇つた。ぎょつとして腰を浮かした龍安の下で、しなやかな体が動いた。

「え、なんじゅと？」

ずいぶん幼い雲師だ。

「ハハハ」と耳を塞ぐ風の中で、竜の呴きはくつきりと響いた。

クモシ?

問う前に白雲は飛び出した。慌てて腕を回してしがみつき、肩越しに振り向くと、背後は波のような雲に包まれている。風音は消えていた。何かが違う、さつきまでと、何が違う?

煌めく粒が視界を掠めた。憑かれたように駆けはじめた白雲の、大きく開いた口元から金色の欠片がこぼれ落ちている。ちりちり、ちりちり。硬い音がして、いつしか辺りは黄金色の粒に包まれていった。長く雲を従えてひとしきり舞つた白雲は、嘆息して喉を反らした。

追われているのではない……われら、雲に乗つているのじやな?

竜は応えない。同時に遙か下、地上では、鉛が笛を離して粗く息をした。

あんな風に飛ぶものはない あれは……何だ、あれは、竜か? 笛を構えた腕がゆっくりと下ろされた。ちりちりと黄金が降り注ぐ地上の姿は、龍安の人形よりはるかに小さかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958q/>

竜ヶ師洞

2011年5月28日11時08分発行